

## 『保元物語』に見る平清盛

郭 順 伊

(一)

平清盛については、多くの先学諸氏によって広範な考察がなされており、今また新たに言及できる点は僅少であると思われる。しかし、平家が滅亡した要因として清盛の悪行が顕著に見られる『平家物語』のみを対象とするのではなく、平家一門隆盛の契機となった保元・平治の乱を描く『保元物語』、『平治物語』の清盛像にも注目したいと考えた。この二作品に登場する清盛は重要な位置にある事は間違いないが、主眼を置かれる程ではなく、清盛に筆が割かれる機会も他の人物達に比べそう多くはないのである。『保元物語』、『平治物語』の清盛像は、一般的に理解されている悪行者清盛の性質が特に際立つ描写であるとも言えず、『平家物語』に見られる清盛とは性格を異にする点も確認できる。本稿では、まず『保元物語』に見られる清盛について検討

し、その特性を考えていく事を目的とする。

保元元年、重態に陥っていた鳥羽法皇崩御の三日後、七月五日『兵範記』記事に、「蓋是法皇崩後、上皇左府同心發軍、欲奉傾國家」と記録され、崇徳院と藤原頼長が皇位奪回のため宮中を襲来するとの風聞が立った。早世した近衛天皇の後継者として、第一皇子の重仁親王に皇位継承が行われて然るべきだと信じていた崇徳院が、雅仁親王（後の後白河天皇）の擁立を恨み、謀反の計略をめぐらしているとの噂である。崇徳院と雅仁親王の父である故鳥羽法皇も、生前、自身の死後に皇位継承を巡る動乱の勃発を予想し、平清盛、源為義ら北面の武士に禁中の警護を命じていた様子が『愚管抄』に記されている。<sup>2)</sup>

カクテ鳥羽院ハ久壽ヲ改元シテ四月廿四日ニ保元トナリニケリ。七月ノ二日ウセ給ヒケル。御ヤマイノアイダ、「コノ君ヲハシマサズハ、イカナル事カイデコン

ズラン」ト、貴賤老少サ、ヤキツ、ヤキシケルヲ、宗能ノ内大臣トイフ人、大納言カニテアリケリ。サマデノ近習者ニモナカリケレド、思ヒアマリテ文ヲカキテ、「コノ世ハ君ノ御眼トチヲハシマシナンノチハ、イカニナリナンズトカヲボシメシヲハシマス。只今ミダレウセ候ナンス。ヨク／＼ハカライヲホセヲカルベシ」ナドヤ申タリケン。サナシトテモ君モ思召ケン。サテキタヲモテニハ、武士爲義、清盛ナド十人トカヤニ祭文ヲカ、セテ、美福門院ニマイラセラレニケリ。

〔愚管抄〕卷第四

ここで鳥羽法皇と祭文を交わした清盛であるが、『保元物語』によると清盛は崇徳院の第一皇子重仁親王と乳母子関係にあったという理由から、法皇没後は当初後白河陣営に召集されなかつたという経緯がある。重仁親王との繋がり警戒されていたはずの清盛に、鳥羽法皇が生前祭文を書かせた理由を、元木泰雄氏は以下のように示されている。<sup>3)</sup>

鳥羽が死去し、それにかかわる治天の君不在となると、武士たちは個人縁故を通して、崇徳・頼長側に味方する可能性があつた。鳥羽は、祭文を書かせることで、その抑止を考えたのである。

宮廷内部の軋轢が良からぬ衝突を生みかねないと、最も懸

念していたのは鳥羽法皇であり、自身の死後、清盛ら武士組織による磐石の備えが必要不可欠と考えていたのである。しかし、鳥羽法皇の崩御後、宮中に召集された後白河側の軍兵について、『保元物語』は以下のように記している。<sup>4)</sup>

鳥羽殿ヨリ右大将公教卿、藤宰相光頼卿、二人御使ニテ、八条烏丸ノ美福門院ノ御所へ進セテ、右少弁惟方ヲ以テ、故院ノ御遺誠ヲ申出ル。新院ト内裏トノ御中アシカルベキ事ヲ、兼テ御心得ヤ有リケン、兵乱出来バ、内へ可參武士ノ交名ヲ御自筆ニテ注置セ給タル故也ケリ。

(半井本上「官軍召集メラルル事」)

法皇の遺言から争乱が生じた際に動員する武士の名が挙げられるが、そこに清盛の名が確認出来ないものである。『保元物語』はその理由を続けて次のように語る。

安芸守清盛朝臣、兵庫頭源頼政、佐渡式部大夫同重成ハ、故院ノ御遺言ノ内ナリシカバトテ、女院ヨリ内裏へ進セラル。清盛ハ多勢ノ者ニテ、一方ノ大將軍ヲモ仰付ラレヌベキナレ共、新院ノ一宮重仁親王ノ御メノト子ナレバ、法皇御心ヲ置セ給テ、御注文ニハ入サセ給ハザリケリ。然共、美福門院ヨリ、「故院ノ御遺言ニ、清盛、内裏ヲ守護シ申セ」ト御使アリケレバ、清盛、

内裏へ参リヌ。

(同右)

法皇の遺誠に清盛の名が列挙されなかつたのは、敵方の崇徳院第一皇子重仁親王が清盛の乳母子である故だと、『保元物語』は語る。重仁親王が清盛の父忠盛と忠盛の後妻池禪尼の養君であつた事は、『保元物語』の他『愚管抄』と『今鏡』にも確認できる。

コノ頼盛ガ母ト云ハ修理權大夫宗兼ガ女ナリ。イヒシラヌ程ノ女房ニテアリケルガ、夫ノ忠盛ヲモモタヘタル者ナリケルガ、保元ノ亂ニモ、頼盛ガ母ガ新院ノ一宮ヲヤシナヒマイラセケレバ、新院ノ御方ヘマイルベキ者ニテ有ケルヲ、「コノ事ハ一定新院ノ御方ハマケナズ。勝ベキヤウモナキ次第ナリ」トテ、「ヒシト兄ノ清盛ニツキテアレ」トオシヘテ有ケル。

(『愚管抄』巻第五)

池禪尼は「新院ノ一宮ヲヤシナヒマイラセ」ていた所以から、乱勃発の際は重仁親王を含む崇徳院側に味方をすると思われていたが、息子頼盛には崇徳院側に勝つ見込みがない事から、異母兄の清盛に付き従うよう、教え諭していたようである。また、『今鏡』第八「腹々のみこ」には、重仁親王について「若宮御傳、刑部卿などいひて、大弐の御乳母の男ときこゆ。」とある。「大弐の御乳母」とは、保元

三年八月十日から永暦元年十二月三十日まで、大宰大弐の官職にあつた清盛の継母である池禪尼と推され、「刑部卿」は清盛の父忠盛という事になる。さらに、『今鏡』には次のような記事がある。

その遠くおはしたりける人のまだ京におはしけるに、白河に池殿といふ所を人の造りて、御覽ぜよと申しければ、渡りて見られけるに、いとをかしく見えければ、かきつけられけるとなむ、

音羽川せきれぬ宿の池水も人の心は見えけるものとぞ聞き侍りし。

「その遠くおはしたりける人」とは、保元の乱の後、配流された崇徳院に同行した女房で、重仁親王の母兵衛の佐だとされるが、その兵衛の佐がまだ京にいた頃、白河にある池殿と呼ばれた忠盛の邸宅を訪問し、「音羽川」の歌を詠んだ話である。この和歌は『統詞花和歌集』にも確認でき、詞書には「平忠盛朝臣六波羅家を新院女房達見にまかれりけるとき、つまどにかきつけ侍りける」とある。『今鏡』では、「白河に池殿といふ所を人の造りて」と名は記していないが、『統詞花和歌集』にあるように「人」とは忠盛の事であり、崇徳院と忠盛が緊密な関係にあつた事がうかがえるであろう。また、五味文彦氏による、

久安六年十二月一日に崇徳の子で一一歳になる重仁親王が元服して三位に叙されると、忠盛夫妻が重仁親王の乳父・乳母とされ、年預として童装束を奉仕しているのである<sup>(8)</sup>との指摘がある。

高橋昌明氏は保元の乱勃発時に忠盛が存命であれば、平氏が崇徳方に味方した可能性は強いとしている。崇徳院の皇子重仁親王の乳母夫であった忠盛の立場は、ことに重要であつたとし、

当時の社会習慣からいえば、乳母夫とその一家は養いかしずいてきた若者が権力の座につくと後見人として大きな威勢を振り、逆に養君が逆境に沈淪しても最後まで苦難を共にする強い人間的な絆のうちにあつた。

と、崇徳院と忠盛の間柄もその「強い人間的な絆」で結ばれていたと解している。その死去に対して、『宇槐記抄』に「數國吏経、富巨万累、奴僕國満、武威人軼、然人為恭儉、未嘗奢侈之行有、時人之惜」(仁平三年正月十五日)と評価された忠盛は、富裕な人格者の鳥羽院近臣として広く認知される中で、崇徳院皇子重仁親王の乳母夫という立場にあつた。忠盛が存命であれば、養君の重仁親王の味方となり、保元の乱をめぐる情勢や平氏の動向にまた現実とは異

なつた展開が待ち受けていたかもしれない。

また、高橋昌明氏は忠盛没後に発生した保元の乱で、崇徳院と後白河、どちらの側につくか決断せねばならなかつたのは、清盛ではなく亡くなつた家長忠盛に準ずる池禅尼や、その息子で清盛の異母弟頼盛であつたとする。そして、先述した『愚管抄』に見られる池禅尼の態度を、「的確な情勢把握と、乳母としての情より平氏の将来を優先した非情の説得」であつたと述べておられる<sup>(9)</sup>。さらに、重仁親王の正式な「乳母子」は、忠盛と池禅尼の間に生れた頼盛であるとし、『保元物語』にある重仁親王と乳母子関係にあつた故に故鳥羽法王の遺言に名を記されず、美福門院によつて召集されたと類する事実があれば、それは清盛ではなく頼盛である可能性も示されている。大島龍彦氏は、『保元物語』や『平家物語』に登場する主君と乳母、乳母子との関係が愛情と信頼で結ばれていたのに対し、敵対関係にあつた「重仁親王とその乳母子平清盛の関係のみ異質である」と指摘する<sup>(10)</sup>。その理由の一つに、重仁親王の乳母は忠盛の後妻池禅尼であり、清盛にとつては継母にあたるため重仁親王と清盛との関係が希薄であつた成立事情を挙げている。忠盛と池禅尼が崇徳院や重仁親王と親交があつた事は、先述した『今鏡』などに見ることが出来るが、高橋昌明氏の

見解にあるように、そもそも重仁親王と密接な乳母子関係にあったのは頼盛の方であり、父忠盛だけを通して乳母子関係にあった清盛は、重仁親王の敵として参陣する事にそれほど強い躊躇や葛藤を抱いていなかった見方もできる。

忠盛亡き後保元の乱に至るまでの情勢を見極めながら、清盛は池禪尼や頼盛の動向を慎重に見守っていたという姿勢も考えられるだろう。『保元物語』には清盛が後に重仁親王の出家に際して、

此宮、故刑部卿忠盛ノ養君ニテ御座ケレバ、清盛、頼盛ハ御乳女子ニテ、見放奉マジキ人ナレ共、内裏へ参ヌル上ハ不及力。御出家ノ由承テ、兩人涙ヲ流テ、泣々惜ミ奉ケリ。(半井本下「重仁親王御出家ノ事」)

と清盛、頼盛共に重仁親王を不憫に思い涙する様子が描かれるが、清盛が出家した重仁親王に哀れみを感じ、特別親密で深い情愛を抱いているとまではいかないであろう。前掲の大島龍彦氏は、さらに清盛の合戦における傾向や、伯父忠正を斬首する態度などから、「慎重に状況を分析する冷静さ、深く思考する策略家としての清盛の性向」が窺い知れ、争乱にむけての状況を判断した結果、重仁親王を見放したとの考えを述べておられる。合戦中の清盛の言動は後に見ていく事とするが、高橋昌明氏、大島龍彦氏両氏の指

摘から、清盛は私的な事情に翻弄されず、院政の状況を冷静に見つめながら、結果現在即位する後白河院の陣営に投じた思慮深い様子が窺えるのである。

## (二)

保元元年七月、崇徳上皇挙兵の報を受け、禁中の警護に当たっていた義朝、清盛を含め多くの軍が高松殿に集合した。その様子を『兵範記』は「軍如雲霞」と記している。<sup>①</sup>

『保元物語』によると後白河軍は義朝、清盛を両大将として、清盛軍は先に挙げた母池禪尼に「ヒシト兄ノ清盛ニツキテアレ」と諭された頼盛や、そのほか教盛、経盛、清盛の長男重盛、次男基盛、また、筑後左衛門家貞やその子貞能など従者、そして伊勢・伊賀を拠点とする古くからの家人であった伊藤景綱父子や、山田是行などを中心に編成されていた。<sup>②</sup>一方で義朝軍は父為義らが敵対する崇徳院側についたため、一族間の対立が深刻であり、清盛軍とは対照的に義朝の一族がほとんど確認できず、東国を中心とした武士たちで編成されていた。『院政と平氏、鎌倉政権』中で元木泰雄氏は、清盛軍の軍事編成を「一門や伊賀・伊勢などの伝統的な所領に係る郎従を、武力の主要な基盤としていた」と指摘する。<sup>③</sup>清盛、義朝両軍の対照的な軍事構成を

五味文彦氏は、

清盛の軍勢は頼盛や教盛などの平氏一門とそれぞれに主従関係をもつ武士が率いられており、全体を清盛が統括する形態をとっていた。そのため従者の名は清盛が動員したもののだけが記されているのであろう。この結果、乱後には一門それぞれに恩賞を得ることになる。

と、合戦後の恩賞の授与にも影響があつたと示唆しておられる。<sup>15</sup>一族が分裂してしまつた義朝軍と比較して、清盛軍は一門の結束が強固であり、従来の拠点である伊勢、伊賀を基盤とした武力が中心にあつたため、清盛が統制をとる一門の組織形態が堅固であつた様子がうかがえるであらう。

それでは、合戦における清盛の動向をもう一方の大將義朝の動きと比較しながら見ていく。『兵範記』によると両大將の清盛、義朝が朝餉の間に呼ばれ、作戦を奏上したとあるが、『愚管抄』には、戦法を練るにあたり「先タ、ヲシヨセテ蹴チヲシ候テノ上ノコトニ候」と、先制攻撃を主張する義朝に専ら主眼が置かれ、清盛については一切言及がないのである。出撃の命令が下り、「安藝守清盛ト手ヲワカチテ、三條内裏ヨリ中御門ヘヨセ参リケル。」と記すのみであり、さらにこの先も『愚管抄』には合戦中の清盛についての記事がほとんどないのである。『兵範記』に「清盛三百

餘騎」、「義朝二百餘騎」、「義康百餘騎」と清盛率いる平氏軍勢が最も多勢で出陣した事、そして、清盛勢は一条大路を、義朝勢は大炊御門大路を、義康勢は近衛大路をそれぞれが進んでいったことが記録される。進撃の目的地である白河北殿は大炊御門大路と対岸しており、義朝軍が中央主力となつて決戦に臨んでいったことが分かるだろう。『愚管抄』にはさらに、

コノ十一日ノイクサハ、五位藏人ニテマサヨリノ中納言、藏人ノ治部大輔トテ候シガ、奉行シテカケリシ日記ヲ思ガケズミ侍シナリ。「暁ヨセテノチ、ウチヲトシテカヘリ参マデ、時々剋々「只今ハ、ト候。カウ候」トイサ、カノ不審モナク、義朝ガ申ケルツカイハハシリチガイテ、ムカイテミムヤウニコソヲボヘシカ。ユ、シキ者ニテ義朝アリケリ」トコソ雅頼モ申ケレ。

〔『愚管抄』巻第四〕

と、源雅頼の日記を通して義朝が時々刻々、戦況を詳細に報告していた様子が記されている。『兵範記』や『愚管抄』からは白河北殿に出軍する主力として、また雅頼に「ユ、シキ者」と評されるように随時戦況の詳報を送り、後白河軍の中でも義朝が中核として合戦に挑んでいた様子がうかがえる。その一方で、最大勢力三百餘騎で出立した清盛勢

については、特に叙述が見られないのである。合戦の様相は『保元物語』が最も詳しく描くが、その『保元物語』の合戦描写は野中哲照氏が述べるように、「源為朝という、一個人の活躍にかなりの叙述が割かれ、為朝の固める門前だけを合戦の舞台としてクローズアップしている」という傾向にあり、為朝以外の人物に焦点が当てられる機会が少ないのである。史料関係からは、義朝が率先して作戦を口上し、主要な戦力として勝利を齎した貢献者である姿が見れるが、一方で、特に注目される動向や事態も見受けられなかつた清盛は、合戦で一心不乱に奮起した一人として名を連ねるには至らなかつたのである。

しかし、僅かではあるが合戦時の清盛に関する記事が『保元物語』には確認できる。もちろん全てが事実とは限らず、虚構性の高い記述も含まれるが、そこには史料に見られない清盛の言動を知る事ができ、大島龍彦氏が指摘する「慎重に状況を分析する冷静さ、深く思考する策略家」としての、清盛の一面を知り得る一つの指標になるのではないかと考えられる。そこで、『保元物語』に見られる合戦時の清盛についてまとめていく。

三百餘騎の軍勢を率いる清盛は、大炊御門の西門で為朝と遭遇する。しかし、為朝の剛弓<sup>19</sup>によって従者の伊藤六が

死亡、負傷した伊藤景綱からその弓勢の威力を知らされた清盛らは、「安芸守ヲ始トシテ、兵者共、物モ申サデ舌ヲ振テヲデアヘリ」(半井本)と恐れ、その場から退却をしようとする。「引返セ給へ」と提案する伊藤景綱に対し、当時中務少輔であつた重盛は、「為朝ガ矢ニ当テ見セン」と、意気衝天に攻撃しようとするが、「若党失テ無益也。重盛ニ目放ナ」と雑色に命じ、清盛は戦う事を阻止するのである。以上が『保元物語』半井本に描かれる清盛の様子であるが、金刀比羅本の清盛は景綱から為朝の弓勢を耳にする以前、為朝の名乗りを聞いた時点で既に、

清盛小聲になりて、「すさまじき者の固たる門へ寄あたりぬるものかな。」とて、以外いぶせげにてす、みもやらず。

(金刀比羅本中「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事」と「すさまじき者」である為朝に対して怖気づく姿が描かれる。半井本に比べ、早い段階で清盛が為朝に臆する姿が見受けられるが、後に『平治物語』の清盛とも共通するように、古態本とされる半井本から後出の金刀比羅本にかけて、清盛の戯面化が見られる一場面であり、事実とは見なし難い点でもある。山下宏明氏が指摘されたように、「第四類に分類される金刀比羅系諸本において、その清盛像は第

一類本とは異なり卑小化されるとともに、併せて理想化されて<sup>(2)</sup>おり、為朝の名乗りだけで恐れを抱いた金刀比羅本の清盛の記事は、虚構が含まれている可能性があるだろう。では、清盛の「理想化」という点は、この合戦の場面から見られるのだろうか。大島龍彦氏は『保元物語』に「思慮」という言葉が目立つことから、『保元物語』の武士形象化に「思慮」という概念が要となつている事を指摘し、その主たる人物に為朝を挙げている。そしてその一方で、

為朝に對戦した主だった武士たちの造型を通して、平安時代末の民衆が懐いていた理想的な武士像と同じ、剛勇で思慮深い武士たちの物語化を目指したと考えられる。

と述べ、「為朝に對戦した主だった武士たち」の思慮深さが見られる一例に、金刀比羅本で積極的に攻め寄せようとした重盛を阻止する清盛の言葉を挙げて<sup>(3)</sup>いる。

安藝守大にさはぎて、「あなあぶなやとよ。八郎がやさきはさる事にてあるものを。わかもの思慮なくてぞはやるらん。各馬のまへに下ふさがつてあやまちさすなあれよ〜。」といひければ、郎等ども馳より〜、左右の水つき、むながひ、鞆所々に取つき〜て、眞中におつとりこめてげれば、心はかくはやれ共、こゝを

ばをして引退く。

（金刀比羅本中「白河殿へ義朝夜討ちに寄せらるる事」）  
「わかもの思慮なくてぞはやるらん」という発言に、清盛の思慮深さを認めておられるのである。直接関係のある記事ではないが、『平家物語』延慶本に鹿谷の陰謀によつて捕えられた藤原成親に対する、次のような評がある。

大方此大納言ハ、オ、ケナク思慮ナキ心シタル人ニテ、人ノ聞トガメヌベキ事ヲモ顧ミ給ハズ、常ニ戯レニガキ人ニテ、無臺事共ヲモ宜ヒ過ゴス事モ有ケリ。

（『平家物語』延慶本第一末「成親卿無思慮事」）<sup>(2)</sup>  
人の意見に顧みる事の不かつた成親を、「思慮ナキ心シタル」人物として延慶本は捉えているのであるが、同様に、為朝の威力を語る伊藤景綱の報告に耳を貸さず、一人突進しようとする重盛を思慮がないと清盛は制するのである。一散に強敵に挑もうとする重盛に比べ消極的に見える面もあるが、状況を考慮しながら判断を下し、無駄死にを避けるため退却を命じた決断の迅速さは、危機と直面した際、不利益な道を渡らず切り抜ける清盛の慎重さを表す一面とも言え、先述した大島龍彦氏の「慎重に状況を分析する冷静さ」が見られる一場面である。同時に、山下宏明氏が述べる合戦における清盛の「理想化」された形象と解する



事も可能であると考える。『保元物語』には、乱後、逃亡を図った為義が東坂本に潜伏しているとの報を受け、清盛に為義追捕の勅命が下り、捜索にあたった事情が記されている。

十六日、六条半官為義、東坂本ナル所ニ籠リタリト聞ヘシカバ、十七日、官軍、幡磨守清盛朝臣ヲ被指遣ケルニ、「此所ニハ、仮ニモ去事無」ト申ケレバ、近所ノ在家ヲ追捕ス。山大衆発リテ、「此所ハ往古ヨリ追捕ノ例無処ナリ。又ハ社司ニモ不触、山門ニモウ（ツ）タヘズ、押テノ沙汰ハ云レ無」トテ射ケレバ、清盛朝臣恐テ引退ク。大衆、勝ニ乗テ、清盛朝臣ガ兵三人ヲカラメ取ル。坂本ヲバ追返サレテ、大津ノ西浦ノ在家ヲ焼払。其故ハ、昨日為義ヲ船ニ乗テ、此浦ヨリ北地ヘ送リタリト聞ヘケルニ依也。僻聞ニテ有ケル者也。

（半井本下「為義降参ノ事」）

清盛は衆徒に攻められ、ここでも戦わずして退却をするのであるが、先ほど取り上げた合戦時と同じく、勝ち目のない無益な争いを避ける傾向にある姿が確認できる。さらに、金刀比羅本では清盛の進入に対して激怒する衆徒に対し、「清盛、此事全く私の所行にあらず、勅命として罷向由返答しけれども」と自発的な行為ではなく、あくまで勅命に

従っただけであると主張している。この清盛の釈明は、為朝に関する伊藤景綱からの報告を受け、退却を決断した清盛の以下の言葉を思い出させる。

大炊御門ノ西門ヲバ、「清盛責ヨ」ト宣旨ヲモ蒙タル事  
モ無。何トモ無寄スル程ニ、暗マガレニ不祥ニテコソ  
此門ヘハ寄当リタル。

（半井本中「白河殿へ義朝夜討チニ寄セラルル事」）  
合戦時には退却の言い分として宣旨にない事を挙げ、衆徒に反抗されては宣旨であり自らの行いでない事を主張する。窮地に立たされた時、やみくもに抗戦するのではなく、その場に応じて自身の正当性を強調し、清盛にとつて有益でない判断した争いからはすばやく引き退く要領の良さも、思慮深さと共に兼ね備えているであろう。

（二三）

清盛の思慮深さは『保元物語』後半に向けて、策略家としての姿を色濃くさせていく。それが乱後の敗者に対する処刑である。『兵範記』七月二十八日の記事に、清盛は叔父忠正、その息子長盛、忠綱、正綱、忠正の郎等である道行ら崇徳院方に味方した者達を六波羅近辺で斬首したとある。また、義朝は翌々日七月三十日に船岡山近辺で、父の為義、

そして兄弟ら頼方、頼仲、為成、為宗、為仲らを斬首した。清盛は叔父を、義朝は父をいずれも親族間の処刑であり、特に義朝に関しては実の父親を死刑に処する事になつたのである。「愚管抄」は義朝が父親を斬首した事に対して、「義トモハヨヤノクビ切ツ」と世間に罵られ非難された事が記述されるが、『保元物語』末文にも「保元ノ乱ニコソ、親ノ頸ヲ切ケル子モ有ケレ、伯父ガ頸切甥モアレ（中略）是コソ日本ノ不思議也シ事共ナリ。」（半井本）と、清盛・義朝両者の行つた近親者に対する処刑について、「不思議」の事であるとその異常性を述べている。清盛、義朝ともに、処刑の相手がたとえ近親者であろうと、動乱をめぐつて鋭く対決してきた相手であり、謀反人として刑に処さねばならぬ事情があつたのである。ただ、この処刑をめぐつて清盛と義朝両者の心境に大きく異なる点のあつた様子が『保元物語』には語られる。半井本には忠正が、「甥ノ幡磨守清盛ヲ頼テ、向タランニ、サリ共、命ヲ助ザランヤト思テ、顕レ向タリケルニ」と、甥の清盛を頼りに命だけは助けられるだろうと思つていたところ、清盛は「無左右伯父ヲ切ニケリ」と躊躇せず斬首に至つたのである。清盛が忠正の助命を受け入れなかつた理由を、半井本は続けて、

扶ケント思ハンニハ、安ク申免スベカリケレ共、伯父、

甥ノ中悪カリケル上、清盛ガ伯父ヲ切ナラバ、義朝、父ヲバ切ランズラント、和讒ニ構テ切テケリ。

（半井本下「忠正、家弘等誅セラルル事」）

と述べている。忠正と清盛の関係が元々不和であつた事情があり、さらには義朝が「父ヲ切ランズラント、和讒ニ構テ」忠正を斬つたという経緯が記されている。金刀比羅本では、

我伯父を切らずは、義朝父を切事よもあらじと思ければ、信西に内々いひ合て、清盛申請て切けるとぞ聞えし。（金刀比羅本中「忠正・家弘等誅せらるる事」）

古活字本では、

誠にたすけんと思はば、さこそあるべきに、舅甥内々不快なりけるうへ、我忠正を切たらば、定て義朝に父をさらせらるべし。たとひ優恕の儀あり共、此旨をも（つ）て支へ申さんと、腹黒におもはれけるこそおそろしけれ。（古活字本中「忠正・家弘等誅せらるる事」）

と、共通して清盛が叔父忠正を斬る事で、義朝も父を斬らずにはいられない状況に陥れようとする清盛の心中がある。半井本の「和讒」を、『新日本古典文学大系』脚注には「悪意を構えて、他の者（ここでは義朝）がつかい事態におちいるようにはかること」とあり、清盛が義朝に父親の処刑

を仕向けるため悪意をもって、自身も叔父を処したという事情を語っている。金刀比羅本は半井本の記す和議を「信西に内々いひ合て」と、後白河院の近臣信西との内談であつたと示す。乱後の処刑を記す『百鍊抄』の記事にも「信西之謀也」という記述が見られ、死刑という極刑を与えた黒幕に信西の存在が当時から囁かれていたのであろう。その信西と清盛が共謀し、義朝を陥れたとするのが金刀比羅本である。

半井本には、清盛の謀略と知らない義朝が、清盛のもくろみ通り次第に追い詰められていく様子が描かれている。

義朝ハ、清盛ガ和議ヲバ覚ラズシテ、乳子ノ正清ヲ呼デ、「コハ、如何センズル。清盛已ニ伯父ヲ切ヌ。院宣ヲ蒙ヌ。宣旨ヲ重シテ、父ノ首ヲハネナバ、五逆罪ノ其一ヲ犯スベシ。罪ヲ恐テ、綸言ヲ軽クセバ、違勅ノ者ニ我成ナンス」  
(半井本中「為義最後ノ事」)

清盛の企てとも知らず宣旨と五逆罪との狭間で身を切るような思いに立つ義朝の苦悩がある。山下宏明氏は、「乱世に身を処するその慎重な態度と、陰湿とも言うべき術策によってライバル義朝を追いつめていく」清盛の姿を指摘する<sup>(26)</sup>。結局は親兄弟を自らの手で斬首するに至つたが、『保元物語』に従えば、義朝は気付かぬうちに清盛の策略にの

せられたという事になるであろう。合戦の功勞者である義朝とは対照的に、敵陣への果敢な攻撃を避けた清盛であるが、その後は義朝を追い込むかの如く策謀し、また信西と内々に水面下での密謀をめぐらし、表立つた行動に出ないその裏側で、望み通り義朝の手によって為義らを処刑させたのである。ここに、策略家としての清盛の姿を見る事が出来るであろう。

以上の点をまとめていくと、保元の乱時に見られる清盛の動向は、慎重で思慮深いという特徴が見られるようである。乱の以前から後白河側と崇徳院側、どちらの陣営に付くべきか当初の段階から、情勢を見極める判断をせねばならなかった。以下の記事は『平家物語』の清盛の言葉である。恐らく、『保元物語』の叙述を踏まえた記事であると思われるが、清盛自身が後白河方に味方した経緯を語る言葉である。

保元に平右馬助をはじめとして、一門半過て、新院のみかたへ参りにき。一宮の御事は、故刑部卿の養君に  
てましまししかば、かたゞ見はなちまいらせがた  
かッしか共、故院の御遺誠<sup>(26)</sup>に任て、みかたにて先をか  
けたりき。  
(『平家物語』覚一本巻第二「教訓状」)

(一)で取り上げた高橋昌明氏や大島龍彦氏が示すように、

実際、重仁親王との乳母子関係に苦悩したのは頼盛と考えられる点や、継母が重仁親王の乳母であった関係の希薄さが、清盛に崇徳院方を味方させなかつた背景とも捉えられ、引用した『平家物語』の言葉にあるように、叔父忠正ら一族間で対立してしまふ事や、やはり父忠盛が崇徳院や重仁親王と交流があつた事に、清盛も一応の迷いが生じていたと考えられる。清盛は情勢を見極めつつ、どちらの陣営に投じるか慎重に考慮し後白河陣営に従う事を決め、合戦や争い事に関しては『保元物語』に見られるように、それらしい理由を示して無謀な戦いを回避してきた。難局を切り抜けるため敏速に撤退の命を下し、無益な戦を避けるための思慮と判断は、清盛の慎重な態度と見る事が出来るだろう。その慎重さは、清盛自身に目立つた言動をさせる事はなかつたが、『保元物語』にある乱後、策略家としての一面に表れるように、注意深く抜け目がない清盛像にも発展しているのである。

注

- (1) 『兵範記』保元元年七月五日条「蓋是法皇崩後、上皇左府同心發軍、欲奉傾國家、其儀風聞、旁被用心也」。
- (2) 『愚管抄』本文の引用は『日本古典文学大系 愚管抄』(岩波書

店)による。

- (3) 元木泰雄氏『保元・平治の乱を読みなおす』(日本放送出版協会、二〇〇四年十二月)。

(4) 『保元物語』本文の引用は以下のテキストを使用し、適宜傍線を施した。

○半井本：『新日本古典文学大系 保元物語 平治物語 承久記』(岩波書店)。

○金刀比羅本：『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』(岩波書店)。

○古活字本：『日本古典文学大系 保元物語 平治物語』(岩波書店)。

(5) 『讃岐の院の一のみこときこえ給ひしは、重仁の親王と申しけるなるべし。(中略)やうやう内の御乳母子の播磨の守、隠岐の守などいふ人ども、かの里や局などの女房など、かみしものことども取り沙汰すべき由承りてつかうまつり、若宮御傳、刑部卿などいひて、大式の御乳母の男ときこゆ。みこも親王の宣旨蒙り給ひて、元服などせさせ給ひぬ。』(海野泰男氏『今鏡全釈 下』福武書店、一九八三年七月)。

(6) 保元の乱の敗退により讃岐に配流された崇徳院に、『兵範記』保元元年七月二十三日条は「女房同車」と記してある。この女房が兵衛の佐だと考えられている。

(7) 『統詞花和歌集』卷第十六 雑上七四二番「おとはがはせきいれぬやどの池水も人の心は見えけるものを」(新編国歌大観 第二卷)。

- (8) 五味文彦氏『人物叢書 平清盛』(吉川弘文館、一九九九年一月)。
- (9) 高橋昌明氏『清盛以前——伊勢平氏の興隆——』(平凡社、一九八四年五月)。
- (10) 注(9)に同じ。
- (11) 大島龍彦氏『重仁親王の乳母子平清盛の異質性——『保元物語』を中心に——』(『論集 太平記の時代』新典社、二〇〇四年四月)。
- (12) 『兵範記』保元元年七月十日条。
- (13) 『保元物語』半井本上「主上三条殿三行幸ノ事付ケタリ官軍勢汰ヘノ事」。
- (14) 上横手雅敬氏、元木泰雄氏、勝山清次氏『院政と平氏、鎌倉政権』(中央公論新社、二〇〇二年十一月) 第一部、二「保元・平治の乱——王権の分裂と混迷」。
- (15) 注(8)に同じ。
- (16) 『兵範記』保元元年七月十日条「此間清盛朝臣、義朝□、依召参朝餉、執奏合戦籌策」。
- (17) 野中哲照氏『『保元物語』合戦部の構造』(『古典遺産』第三十九号、一九八八年十二月)。
- (18) 注(11)に同じ。
- (19) 為朝の剛弓については『吾妻鏡』にも以下の通り記述されている。「景能は保元合戦の事を語る。この間申して云はく、勇士の用意すべきは武具なり。就中に、締め用うべきは、弓箭の寸尺なり。鎮西八郎(為朝)は、わが朝無雙の弓矢の達者なり。」(『吾妻鏡』第十一建久二年八月)。
- (20) 山下宏明氏『『保元・平治物語』における清盛像』(『保元物語・平治物語』第九号、一九七六年九月)。
- (21) 大島龍彦氏『『保元物語』における武士形象化の断面』(『中国文学』第六号、一九八七年三月)。
- (22) 『延慶本平家物語』(勉誠社)。
- (23) 『兵範記』保元元年七月廿八日条「今夕被行斬罪云々、忠貞、長盛、忠綱、正綱、道行、(忠貞郎等)已上播磨守清盛朝臣、於六波羅邊斬云々」。保元元年七月卅日条「為義、頼方、頼仲、為成、為宗、九郎、已上左馬頭義朝、於船岡邊斬之」。
- (24) 『百鍊抄』保元元年七月廿九日条「源為義已下被行斬罪。嗟哦天皇以降所不行之刑也。信西之謀也」。
- (25) 注(20)に同じ。
- (26) 『新日本古典文学大系 平家物語』(岩波書店)。